



## トピックス

- 年頭所感
- 農を変えたい！全国集会in今治のご案内
- 2008年度下半期の主な活動

[www.ofrc.net](http://www.ofrc.net)

特定非営利活動法人  
有機農業技術会議 事務局  
発行責任者：藤田 正雄

## 年頭所感

20世紀は地球に眠っている地下資源をどれだけ掘り当て、それを使うかが国の力であった。その傾向は前世紀の終わりまで続いてきたように思う。それが昨年中国四川省大地震で明らかに塗り替わったような気がしてならない。リン鉱山が壊滅したとの報道以降、中国は資源を海外に出すことに対して強力な歯止めをかけるようになったのである。それが何を意味するのか？ はっきり言おう。わが国がリンを潤沢に輸入できる時代ではなくなったという事実である。

21世紀は前世紀よりも激しい資源戦争の時代に突入したと考えるべきであろう。地下資源に乏しい我が国で、これまではふんだんに使っていた肥料を、どれだけ節約しながら作物生産を持続できるかが、国の浮沈の分かれ目にはならないだろうか。

今のところ、ほとんど輸入に依存している飼料穀物に由来する家畜糞が、廃棄処分になるほど有り余っている。しかし、それを目当てにして、有機農業だけでなく慣行農業も含めて我が国の作物養分のかなりは事足れるとするのは、早とちりというものであろう。かつて土壌学の教科書の冒頭にあった「我が国の農地の

## 西村 和雄（有機農業技術会議代表）

大半を占める火山灰土壌は強酸性土壌で、活性化したアルミニウムがリンを固定してしまう。生産力を上げるためには酸性土壌の矯正と有効態リンの投与が不可欠である云々……」の文章はすでに古文と化し、現在では火山灰土壌の農耕地がすでにpH7を超えてしまっているのが現状である。

我が国の農耕地土壌はすでに相当富栄養化している。それでいて、いまだに土壌中の無機態養分しか測定しないままに、やれリンが不足だとか、カルシウムが足りないよ、マグネシウムが……といった提言が、土壌養分の分析結果に基づいてなされているのが現状である。そしていまだに、資材を投与し続けている。そろそろ資源が尽きるのだという未来予測と、その時までにはどうするのだという現実世界を看破した方がよい。そして、資材依存型の農業に歯止めをかける。たとえそれが有機農業であっても、資材に依存するのではなくて、省資源の方向に向きつつ、有機農業の第Ⅱ世紀の課題としなければならないように思える。そこにこそ、資源の儉約と持続的農業を並立させるべき課題を持たなければならない。しかも食料自給

## ご案内

## 第4回 農を変えたい！全国集会in今治

有機農業をはじめよう！（参入促進分科会）

農を変えたい！全国集会in今治のなかで、「有機農業をはじめよう！」と題した分科会が企画されています。有機農業をはじめめるための心構えは？ はじめた後にはどのような問題があるのか？ 慣行栽培から転換するには？ 様々な角度から、有機農業をはじめめるためのヒントをご提供できればと考えております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開催日 2009年2月28日（土） 15:00～17:50  
場 所 テクスポート今治 中ホール（愛媛県今治市）  
参加費 集会全体で2,000円（学生1,000円）  
申込先 農を変えたい！全国集会in今治四国実行委員会  
E-mail [nourin@imabari-city.jp](mailto:nourin@imabari-city.jp)  
TEL 0898-36-1542  
FAX 0898-36-5266

15:00 基調報告「土佐自然塾の人づくり」  
山下一穂氏（土佐自然塾塾長 有機農業技術会議理事）  
15:15 参入促進フォーラム  
コーディネーター：大津清次氏（無茶々園専務理事）  
コメンテーター：西村和雄氏（有機農業技術会議代表）  
大学生による研究発表・ディスカッション  
17:20 有機農業生産者懇話会との懇談  
※会場の生産者との意見交換

率の向上と国民の食料をどれだけ確保できるのかという重い課題がその次に控えていることを自認しつつまねばならない。

私が、昨年来言い続けている低投与型の有機農業が持つ意味を、もう一度考え直してほしい。農業技術は、決して不変的なものではなく、ましてやグローバルizmとは何の関係も持ち得てはいない。技術はつねに前へと進むべきものであって、後退は許されるものではない。後退は敗北を意味する。

地域主義に根差した、限定された地域にだけ許されるべき農業の形態こそが、その地域を支える地産地消

の意味を持つべきである。しかしそれは同時に、封建的な閉鎖主義を指すものではなく、積極的に地域主義を自立させる前向きな試みであるべきだと私は考える。我が国の21世紀の農業は、どのようなベクトルを持ち得るものなのか、それを決めるのは農林水産省ではなく、地域の行政でもない。有機農業者の自立と、それゆえにこそ求められるべき消費者との連帯こそが、我が国を支える土台となるであろうと、私は確信をもって敢えて言い続けることにする。

願わくは、有機農業こそが、我が国の21世紀における根幹技術を指し示す存在になっていただきたい。

## 2008年度下半期の主な活動

今年度は、多くの方に有機農業の基本を理解していただくために、福島県、島根県、埼玉県、秋田県などで、2007年より実施している公開セミナーを充実させ、情報交流会、相談会も開催しました(表1)。国の有機農業推進団体支援事業(参入促進事業)の補助金の交付を受けて、有機農業推進団体の協力を得ながら、有機農業の実施者を増加させるための事業も進めています。今年度の特徴として、公開セミナーを県の担当職員の方とともに実施できたこと、都道府県の行政担当者、試験研究担当者などの参加が多かったことがあげられます。公開セミナーのなかでも、西村和雄代表が講演した「有機農業栽培体系の分類と特徴」への反響は大きく、私たちの目標としている有機農業のあるべき姿が多くの方に理解していただけたと考えています(なお、公開セミナーなどの資料集はウェブ上

にて公開するとともに、有料でお分けしています)。

なかでも、「第3回有機農業技術総合研究大会」では「東北の有機農業の可能性を探る」をテーマに、基調講演、シンポジウムを開催しました。また、稲作、畑作・果樹、畜産、生物多様性の各分科会では、事例をもとにそれぞれの内容を深めることができました。

初めての取り組みとして、「有機農業研究者会議2008」を開催し、農研機構、15道府県農業試験場、大学および民間研究者が集まりました。国の有機農業研究の予算化が進むなか、有機農業に携わる研究者が一同に介して、有機農業の研究内容について講演発表を聞くとともに、それぞれの直面している課題について情報交流を行いました。参加者からは、今後とも有機農業研究の情報交流の場を定期的で開催してもらいたいとの要望が多く寄せられました。

表1 有機農業技術会議が関わった2008年度下半期の主な活動

10月4-5日	「北海道有機農産物フェア」(北海道江別市) 600名参加
10月7-8日	第5回公開セミナー「有機農業大学講座in島根・浜田」(島根県浜田市) 240名参加
10月25-26日	「有機農業フォーラムin小川町」(埼玉県比企郡) 180名参加
11月2日	「オーガニックフェスタかごしま2008」(鹿児島県鹿児島市) 約20,000人参加
11月5日	「あいち有機農業フェスタ2008」(愛知県名古屋) 約2,000名参加
12月5日	「第3回有機農業技術総合研究大会」(秋田県秋田市) 150名参加
12月15-16日	「有機農業研究者会議2008」(静岡県伊豆の国市) 70名参加
1月24-25日	「第4回農を変えたい!東北集会inふくしま」(福島県福島市) 500名参加

### 賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

#### NPO法人

#### 有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

(財)自然農法国際研究

開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net